

かみす七夕まつり

8月5日(土)・6日(日)開催

旧暦の七夕前後に、港南通り・すずらん通りで開催される「かみす七夕まつり」。商店会や地区が一体となって続けてきたこの祭りは、今年50回目の節目を迎えます。

七夕のシンボルといえば華やかな飾り。残念ながらコロナ禍の3年間で老朽化が進み、例年のように商店街を彩ることは難しい状況です。そうした中、若いメンバーから「祭りを新しく変えていこう」という前向きな声上がり、キッチンカー村などの新しい試みが予定されています。祭事委員長の伯耆進さんは、「七夕まつりの魅力は人のふれあい。形が変わっても、



伯耆委員長

地元をつながりや賑わいを維持していく上で、続けることが大事です」と祭りへの思いを語りました。



七夕飾りと通りを練り歩く山車

大潮祭



大潮祭は、波崎地区の氏神である手子后神社の祭典です。見どころは、鳴り物やあばれ太鼓に先導されて市内を練り歩く神輿。クライマックスには「よーい、

よいやっせい」の掛け声が響き渡り、荒々しく神輿が波打ちます。

コロナ禍では神事のみを執り行ない、地域からは「さみしい」「波崎ではないみたいだ」という声が上がりましたが、今年、7月29日(土)・30日(日)に開催された祭りで神輿も完全復活。手子后神社神職の鈴木伸吾さんは、「祭りは波崎地区の人々の心のよりどころだと思います。地域の皆さんの思いは強い。祭りが、人と人をつなぐためのきっかけとして続いてほしいです」と祭りや地域への思いを話しました。



かみすみなと祭り

7月の最終土曜・日曜日、大野原中央通りで行なわれる「かみすみなと祭り」。今年は残念ながら中止となりましたが、例年は歩行者天国を山車や神輿が練り歩き、浜松公民館に設営されるステージでは太鼓演奏やまとい演奏などが披露されます。ジャンケン大会やビンゴゲームを中学生が企画するなど、若い世代も祭りの運営に参加。昭和47年、鹿島港の開港を記念して始まった祭りは、地域住民のふれあいの場として若い世代に受け継がれています。



きらっせ祭り

8月27日(日)開催

波崎海水浴場の周辺で開催される「きらっせ祭り」。メイン会場では地元グルメが楽しめる青空市が開催されるほか、鳴り物や手踊り披露などのイベントも企画されています。「きらっせ」は「どうぞお越してください」という意味。盛りだくさんの催しで来場者を楽しませ、県内外から観光客を呼び寄せる盛大な祭りに成長しています。見どころは、昼から夕方にかけて市内を練り歩く神輿パレードと打ち上げ花火。約5,200発(予定)の花火が波崎海岸の夜空を彩ります。



道をはじめ、千葉県、三重県、岐阜県など、全国トップレベルの人気チームが集結します。これまで札幌のYOSAKOIソーラン祭りに行かなければ見られなかったスターチームを、地元の神輿で見られるなんて幸せですよ」と胸を張る野口さん。全国各地へと交流の輪が大きく広がっています。

中止期間を経て、新たな挑戦へ

2019年の第10回かみす舞ちゃ祭りには全国から約60チームが集まり、見事なパフォーマンスを披露して大盛況となりました。しかし翌2020年から新型コロナウイルスの影響で中止せざるを得ない状況に。特に昨年は実施に向けていったんは動き出したものの、直前で中止というつらい判断を迫られました。そうした困難な状況の中でも、実行委員会の皆さんは「2023年に開催するのなら新しいことに挑戦し、前回以上の祭りにしよう!」と心を一つにして構想を練ってきました。

「実は札幌のYOSAKOIソーラン祭りの飲食ブースで、神輿グルメを提供したことがあります。ピーマンの丸焼きがよく売れて、航空便で1日10箱ずつ取り寄せたほどです。その時に交流があった全国各地のご当地グルメは、かみす舞っちゃ祭りにも出店してくれています。そういう商品と競い合っている、地元の皆さんがもったいないもの、



地元はもちろん全国各地のご当地グルメも多数出店

「今年はメインステージに大型LEDビジョンを設置し、協賛各社の紹介やCMを放映するほか、サーチライトで華やかにステージを照らします。また、大型モニターを設置した10トントラックも用意。フードコーナーにもモニターを配置し、ステージの映像を流します。さらに、インターネットでライブ配信もする計画です」



祭り専用トラック「地方車」

みんなの力で関東一の祭りに

新しい試みが加わり、ますます華やかさを増す、かみす舞っちゃ祭りに。会長の野口さんをはじめ実行委員会の皆さんは、「踊り手みんなが憧れるような舞台を用意し、関東一と呼ばれる祭りにしよう!」と気合十分です。

地元の祭りに情熱を注ぐ人々たちを、愛情を込めて「祭りバカ」と表現する野口さん。自分もその一人とのこと。「かみす舞っちゃ祭りの実行委員会には、損得勘定抜きでのめり込む仲間たちが集まっています。頭で考えていたら動けないし、一人では何もできません。みんなの力で一つの祭りを作り上げています」

多くの人が集まって地元が元気になる喜びを、踊り手も観客も、今年は存分に味わえそうです。



各チームの旗士による旗の共演



関東一と呼ばれる祭りを目指して4年ぶりに復活